

10) DMP 患者の生活指導における遊び について

国立徳島療養所

中西 誠 早田 正則
川合 恒雄

子供の人格形成における遊びの占める割合は大きいとされているが、DMP患者はその身体的障害故に非常に狭い生活空間を余儀なくされている。従って、彼らの遊びも屋外での遊びが容易にできない、既製遊具は使用不可能なものが多い等、多大の制約を受けている。ところが彼らは彼らなりの条件下で遊んでいると思われる。そこで、今回は遊びの実態をアンケート及びソシオメトリックテストを用い調査することによって、今後の生活指導の一助とする。

調査対象は当所入所中DMP患者30名であり、年齢は8才～16才、上田式機能障害度1～8の者である。

1. 方法として、遊びの種類、遊びのグループについて日常世話をしている看護婦11名にその観察結果をアンケート形式で調査した。これによると、遊びの種類は20種類あり、野球・プラモデル作り、ミニカー遊び・テレビ観賞・マンガを含む読書・音楽鑑賞が上位を占めた。また、遊びのグループについては、野球・プラモデル作り・ミニカ遊びのグループとベッドの遊びのグループに分類された。
2. ソシオメトリックテストからみた交遊関係を調査する目的で「ベッド換えをするとしたら、あなたは誰のとなりになりたいですか、2名記入してください」という質問をしてみた。その結果、4グループからなる交遊関係がみられ、3名の人気者と3名の孤立者が認められた。
3. アンケートとソシオメトリックを比較対応してみると、4グループはそれぞれ野球(11名)、プラモデル作り(7名)、ミニカー遊び(5名)、ベッドでのひとり遊び(4名)であり、野球を除いては手先を使った遊びであった。ところが障害度7～8度、年齢14才～16才の者(6名)はすべて野球グループに所属していた。そこで野球の基礎的能を調べる目的で、10m移動タイム・ボール投げ、バットが振れる範囲、補球より送球までのタイムについて調査をしてみた。それによれば、それぞれ平均に劣るが、バットが振れない者が2名、送球不可能の者が4名いた。なお、そのうち1名は電動車椅子を使用している。上記4名のうち2名は人気者であり、野球の基礎的能力では劣るが、特別ルールをつくったり、他の者に補球・送球・移動等の動作を補ってもらっていた。また、グループ内での役割を観察していると、選手ではあるが、ときには審判であり、知識の提供者であることがわかった。

以上の調査検討から種々の問題点をとらえることができた。さらに今後追跡する。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

子供的人格形成における遊びの占める割合は大きいとされているが、DMP 患者はその身体的障害故に非常に狭い生活空間を余儀なくされている。従って、彼らの遊びも屋外での遊びが容易にできない、既製遊具は使用不可能なものが多い等、多大の制約を受けている。ところが彼らは彼らなりの条件下で遊んでいると思われる。そこで、今回は遊びの実態をアンケート及びソシオメトリックテストを用い調査することによって、今後の生活指導の一助とする。